

『虞美人草』の宗近君と甲野さんの会話。

宗近『恐ろしい頑固な山だなあ』

甲野『君はあの山を頑固だといったね』

宗近『うむ。動かばこそといったような按排じゃないか。こういう風に』

甲野『動かばこそというのは、動けるのに動かない時の事をいうのだろう』

宗近『そうさ』

甲野『あの山は動けるかい』

『行人』のHさんから一郎への言。

『君は山を呼び寄せる男だ。呼び寄せて来ないと怒る男だ。地団太を踏んで口惜しがる男だ。そうして山を悪く批判する事だけを考える男だ。何故山の方へ歩いて行かない』

以上の会話にふと共通感を抱いた。「哲学者：甲野欽吾」は「学者：長野一郎」ではないか。二人の知識人には動かない山を動かそうとする潜在意識があるように思う。この場合の「山」は甲野藤尾と母であり、一郎の妻の直である。山は自然が創ったもので、人力で動かせるものではない。即ち、欽吾と一郎の学識上の理論が、女の持つ自然の感情を動かさないことを意味するのではないだろうか。理論で人間の日常性を「動かす」ことはできない。つまり人の心は理屈で割り切れないということである。